安曇野市公民館報

安曇野市
中央公民館
No.37 2017.7.5
TEL71-2466

第11回安曇野市公民館大会

5月21日（日）午後2時から豊科公民館大ホールで安曇野市公民館大会が開催され約300人が参加した。

市歌斉唱

公民館は市民の日常生活に最も近い生涯学習の場であり、一人一人が豊かな人生を送るために、生涯学習社会の充実が不可欠である。本大会は地域づくりにおける公民館のあり方を研究協議し、公民館活動の発展を推進する目的で開催された。開会式では公民館活動推進功労者表彰と地区公民館報表彰が行われた。受賞者及び受賞した公民館は次のとおり。

公民館活動推進功労者（敬称略）

▼元潮沢地区公民館長　二木　幸三

▼元大口沢地区公民館長　望月　逸郎

▼前殿村地区公民館長　新井　基之

地区公民館報受賞

▼最優秀賞　豊里地区公民館

▼優秀賞　野沢地区公民館
柏原地区公民館

受賞者の皆さん

事例発表　どうせやるなら楽しく前向きに！

事例発表では、野沢地区公民館（三郷）の樋口眞さんが「どうせやるなら楽しく前向きに！」と、年度ごとの公民館役員がそれぞれ事業を考え実施している様々な活動を紹介した。公民館活動は地域福祉の基礎であり実践の場であるとともに住民同士のつながりを深める役割があると語った。

その中で「地域」とは…

「ち」近くの人と
「い」息の長い
「き」絆づくり

また「福祉」とは…

「ふ」普段の
「く」暮らしの
「し」幸せ

と、定義していた。役員が楽しみながら、公民館活動をすすめることが生涯学習や地域福祉の推進をはかり、何かあった時にも「顔の見える関係性」で課題を解決できる。本年度は野沢地区が出来て62年。20年、40年の時にも出した「二十年のあゆみ」「四十年のあゆみ」につづき、「六十年のあゆみ」発行を目指すそうだ。ますます元気で明るい地区になるだろう。

講演会　群がりづくり～やっちゃえ！公民館～

講演は脚本・演出家であり森の宿林りん館館長の丸田勉さんが「群がりづくり～やっちゃえ！公民館～」と題して、ご自身の体験されてきた数々のエピソードを、ユーモアたっぷりに話された。また、小川村公民館で実践している「音楽とお酒を楽しむ会」について、映像を交えながら話された。

公民館講座の概念では思いつかない活動も「やってみよう」という住民パワーを大切にしていることなど、今後の公民館活動の参考となる講演となった。

地域づくりにおける公民館のあり方を研究協議するとともに、「ともに学びあう場・ふれあう場」としての公民館を再確認し、公民館活動の発展を推進する大会となった。

地区公民館だより

潮沢地区公民館（明科）

潮沢地区公民館は、明科地域の北東に位置し、国道403号線と潮沢川に沿って約7キロの奥行に13常会が分布する。東筑摩郡生坂村と筑北村、松本市四賀に隣接した山間地域で、昭和26年（1951）頃には戸数362戸、人口1801人だったが、現在では戸数133戸、人口328人にまで大きく減少した小規模な地区である。

戦国時代には平家の落人が棲みついた地区でもあり、30を数える山城が散在した歴史もある。また石仏も豊富である。

地区公民館行事として、夏祭り、東川手4地区（潮北・潮南・木戸生野・潮沢）ソフトボール大会、人権講話、敬老会、しめ縄作り講習会、その他明科公民館主催のアヤメスポーツ大会、市民運動会、あやめ杯ワンバウンドマッチなどにも参加し、これらの機会を通して住民同士の交流と親睦の輪を広げている。

地区内にJRの廃線敷やけやきの森を有しており、県内外から観光バスで多くの人達がウオーキングなどの癒しの場として来域し、春から秋までにぎわいを見せている。その「けやきの森自然園」一帯を利用させてもらっての夏祭りには、関東から夏休み中の子どもたち一行が近傍に宿泊参加して、地区の人たちとの盆踊りや役員の作った料理を口にするなどして、楽しい盛り上がりを見せていた。そのような事が何年も続いた。

しめ縄作り講習会は、地区の方に講師をお願いし、育成会の子どもたちも参加して和やかな雰囲気で行われ、伝統継承や情報交換の場になっている。

しめ縄作り講習会

高齢化社会が憂慮される昨今。当地区も各種行事への参加者集めや役員会の実施に苦慮することも多々あり、地区の人々に理解と協力を求めつつ、さらに、いろいろ模索し、新たなる地区活性化を目指したい。

（公民館長・小林公緒　主事・小林公男）

古きを尋ねて

㉕穂高山宗徳寺（穂高・本郷）

曹洞宗、穂高山宗徳寺は、JR穂高駅より南西約1キロの田園地帯にあり、近くには穂高南小学校がある。

宗徳寺の開創は、天正2年（1574）に仁科盛棟を開基となし、大町市の霊松寺、十三世林山茂道大和尚を中興開山として、本尊である十一面千手観世音を安置して供養し奉ったことから始まったという。

それから後、幾度かの隆盛、荒廃を重ねてきた。明治維新の神仏分離令に基づいた廃仏毀釈運動により、仏像を始め、絵巻、書伝、宝物等はおろか立木に至るまでことごとく他に搬出や売却され、諸堂伽藍をも壊され寺領は没収された。寺跡は明治9年（1876）今の小学校にあたる穂高美学校として利用され、田畑は民有地となり廃寺となったが、十五世大機良道和尚が檀信徒とともに県令へ再興願いを届け、明治17年（1884）再興を果たした。

当時は庫裡に仏様を安置するところから出発し、本堂、鐘楼などはその後の住職・檀信徒の尽力より建立されたものばかりだ。本尊は、廃仏毀釈の際に他に本寺である霊松寺に預けられ、再興の時に再び安置することがかなった。制作年代は定かではないが、室町末期であるとされている。この観音は一切の衆生を救い、利益を与えるには、普通の姿では威力が少ないため、頭部に11の顔を表し、手が千本の変化観音として救済の範囲が広大なことを表している。

旧本堂は豊科の日光寺の本堂を移築したものだったが老朽化が進み、平成23年に新しく本堂、山門、諸堂が建立された。本尊のように幾多の苦難にも耐え、幾多の人の手による尽力で宗徳寺は法燈を受け継ぐことができている。

十一面千手観世音

私は一生懸命

地質学研究者　木船　清さん（三郷）

元来は中学校の理科の教諭で、勤務の傍ら「地質学」の研究に没頭した。「地質学は石を探して歩き回るようなものだ」と言い「道は知らないが川はよく知っている」と言う。数学志向であったが、大学時代の先輩の薫陶で自然科学にのめりこんでいった。

教員時代、夏休み等を利用した信濃教育会の臨時講習で長野県中を研究仲間と歩き回った。その成果として昭和59年（1984）～平成2年「松本盆地のおいたちをさぐる」の題名で教育会の編集による教育用の教本を作成した。

定年後、当時の三郷村教育委員会に在職して年4回の講座を開設し、拾ケ堰歩き等を実施して現在に繋がる「ふるさと講座」のもとを築いた。また「科学探検隊」として子どもの活動拠点を作り、現在も続く「凧クラブ」を結成した。

現在は「ふるさと講座」の講師として「三郷・黒沢川のビオトープ探検」「栂池の地質や姫川の川真珠貝の生息」等の講座に同行するとともに、かつて初期の発掘に10年ほど参加して携わっていたという「野尻湖のナウマンゾウの化石」をめぐる講座にも随行する。

安曇野市誕生直前の平成8年～16年、「三郷村誌Ⅱ」の刊行にむけて「三郷村誌編さん委員会」事務局業務に従事し、自然部会の副委員長として編集に関わり執筆もした。

傍らに地質学雑誌の5月号が置かれていて「あまり有名ではないが」と前置きし「日本の国石が決められた際、俗説では水晶とされていたが、平成28年に日本鉱物化学会が翡翠に選定した」「日本は沈み込み帯にあり翡翠が出来るのだ」と話した。

「地形を見るのは海外に限る。1年に1回は行く」「地質学はイギリスで発展し産業革命にも影響を及ぼした。また日本にない地質や化石がある」と言う。85歳になり後進に道を譲りたいと言うが、ますます探求心旺盛、意気軒高である。

（東山路）

グループ紹介

煎茶道方円流

煎茶道とは、茶道のひとつ、急須等を用いて煎茶や玉露などの茶葉に湯を注いで飲む形式をとる。抹茶と異なり日常生活のごく平凡なひとこまに登場するお茶であるから、しきたりや形式的なことはニの次である。もてなす立場で、いかにおいしいお茶を入れるかという心配りが最も大切である。

江戸時代中期、中国の明の時代、中国の僧「隠元禅師」が日本にもたらし、文人墨客たちにより、自由を求めお茶を味わい楽しみながら諸道具を観賞し、詩を読み、画を語り、お茶と芸術とが合体してできた煎茶芸術から生まれた茶道である。

全日本煎茶道連盟は34流派あり、事務局は宇治の黄檗山万福寺（中国の僧「隠元禅師」開祖）にある。その流派の一つである煎茶道方円流は、京都に家元（水口豊園）があり全国に8部会と28支部、本部事務局と海外事業部とで構成されている。

平成3年、豊科公民館で煎茶道講座が開かれた。講師は、煎茶道方円流家元総師範の近藤順園先生である。方円流煎茶道の心「水は方円の器に従う」という言葉にあやかる様に、また、行いは正しく（方）心は丸く（円）を平常の心に生かせるようにと願いが込められている。また、6年前にも同講座を豊科公民館で開催し、その参加者が月2回豊科公民館で活動している。毎年豊科地域文化祭の「一般展示・盆栽展・芸能発表」の際豊科公民館大ホールホワイエで茶席を開き来場者にお茶を振る舞う。

私たちの活動は、煎茶をはじめ夏には冷たい玉露を、寒い季節には熱々の番茶に漬物を添えて、時には紅茶をと季節に応じたお茶を楽しみ学んでいる。現在会員は24人で、今までに9人の師範が誕生している。

代表者　近藤　順園
事務局　小宮山　瑞園
（72－9195）

（宏雲）

ほりがね

ふるさと常念の里講座

堀金公民館は5月20日「拾ケ堰フットパス」（地域の風土を楽しみながら歩く小道）を開催し、23人が参加した。講師を務めた山田賢一さん（堀金公民館長）は、自らが「拾ケ堰土地改良区」に関わりがあり、その経験から歴史や実態を説明した。

松本市島内の取水口、拾ケ堰頭首工（奈良井川）までバスで移動し、8時30分頃、約9キロの行程をスタートした。梓川サイフォンを通り豊科南部総合公園、じてんしゃひろば（三郷）を通り抜けて11時頃、堀金公民館へ到着した。後はバスで拾ケ堰放水口（烏川）まで往復して全日程を終えた。

拾ケ堰の沿道が安曇野ハーフマラソンのコースの一部となっているためか、整備された自転車道や歩道を行き交う人の数が多い。「拾ケ堰」は平成28年に開削200年を迎え、11月には「世界かんがい施設遺産」に登録された。

（東山路）

下鳥羽新切橋から常念を望む

ほたか

世界を巡る料理教室 ロシア編

5月16日、穂高公民館は「世界を巡る料理教室」の初回、「ロシア編」を開催した。講師は安井邦夫さん（明科公民館長）で、23人が参加した。

ピロシキは生地にラードと水あめを用い、ふんわりモチモチに仕上がった。煮込み料理ボルシチはビーツを用い紅色のスープが目にも鮮やかであった。

料理教室は3回目の参加という穂高在住の中島悦男さんは「普段料理はしないけれど、他の人と協力すると作れる」と感想を語った。

とよしな

豊科公民館駐車場オープン

5月1日、豊科公民館駐車場がオープンした。一般用駐車スペース140台、障がい者等用駐車スペース6台である。オープンに先立ち工事完了式が行われた。

豊科公民館は、利用率も高く待望の駐車場完成である。特に公民館大ホールは、700人収容可能であるため、従来からある駐車場を合わせて260台駐車可能となり改善され利便が高まった。

この駐車場は、豊科公民館駐車場としてだけでなく、近隣商店街の活性化ならびに災害時の避難場所としての役割も併せ持つ多機能駐車場である。

あかしな

人生の終い方講座

5月25日、明科の長峰荘で昼食付きの公民館講座「人生の終い方講座」が行われ、24人が参加した。

講師の小笠原教明さん（明科図書館長）は、実母を弟妹と3人で遠距離介護。写真を使って会話することで、認知機能回復と心豊かな看取りを実践。もう1人の講師の庵谷寛さん（アステップ信州）は、より良い終い方をするために「鉛筆で何度も書き直しを」とエンディングノートを紹介。

講座終了後、昼食を食べながら参加者の皆さんで歓談を楽しんだ。

みさと

ポールウオーキング教室

三郷公民館は5月4日から25日まで4回にわたり、木曜日の夜7時30分からポールウオーキング教室を開催し、各回とも数人が参加した。三郷文化公園グランドの照明に映えるユリノキ並木の外周で、スポーツ推進委員の松田久雄さんの指導により、ポールを使ったウオーキングを体験した。

「ポールウオーキング」はスキーのストックに似た2本のポールを使って歩くことで、上半身を使った全身運動となり運動量が30％ほど増加する。さらに身体のゆがみを解消し筋力バランスを整え、腰痛や膝痛の予防になるといわれている。「歩くことは健康に良い」と言う概念が日常生活に浸透しているが、参加者は夜風を切って颯爽と「ポールウオーキング」を楽しんでいた。

（東山路）

欅

ハナミズキ、フジ、ヤマボウシと花のリレー。新緑が深緑となる美しいこの時期。梅雨入りで雨に濡れた緑もまた趣がある。季節の移り変わりを楽しみたい。（K・T）